

全体概要 達成目標

達成目標

福島第一原発事故の被災自治体である浪江町の町民の多くは、仮設住宅などで分散居住を余儀なくされている。仮設住宅団地などを核にした分散する居住拠点を「町外コミュニティ」と呼び、さらに点在する公共施設との有機的な連携によって成り立つ状況を「ネットワーク・コミュニティ」として位置付け、高齢者の長期にわたる避難生活を、安定し充実した活力ある地域社会とするため、以下に示す4つの目標を達成する。

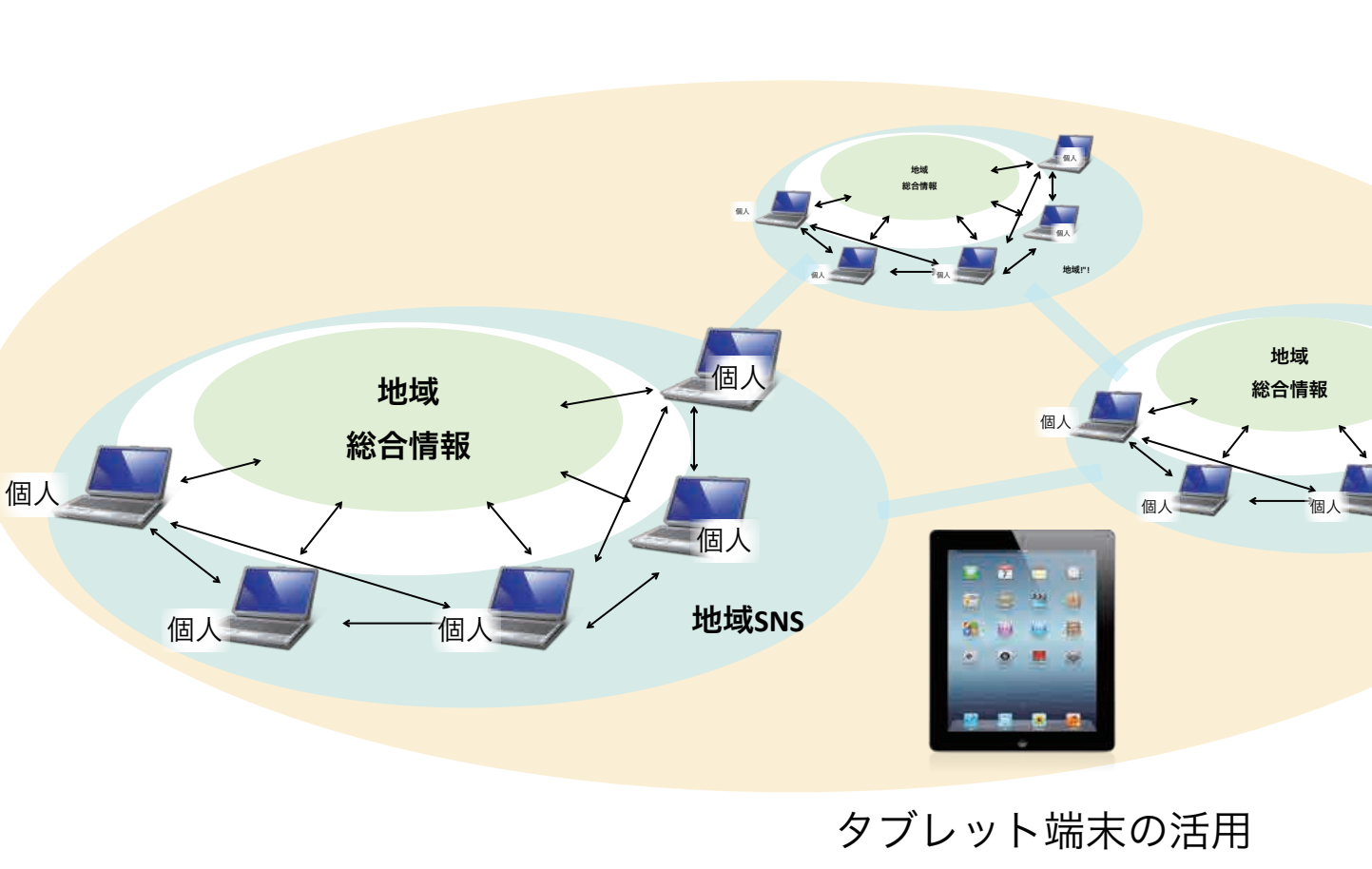
これにより、災害の影響による多居住・分散型コミュニティを具体的に検討し、それが高齢者のウェルビーイングにどのような影響をもたらすのかを解明する。

I：町外・町内コミュニティのデザイン

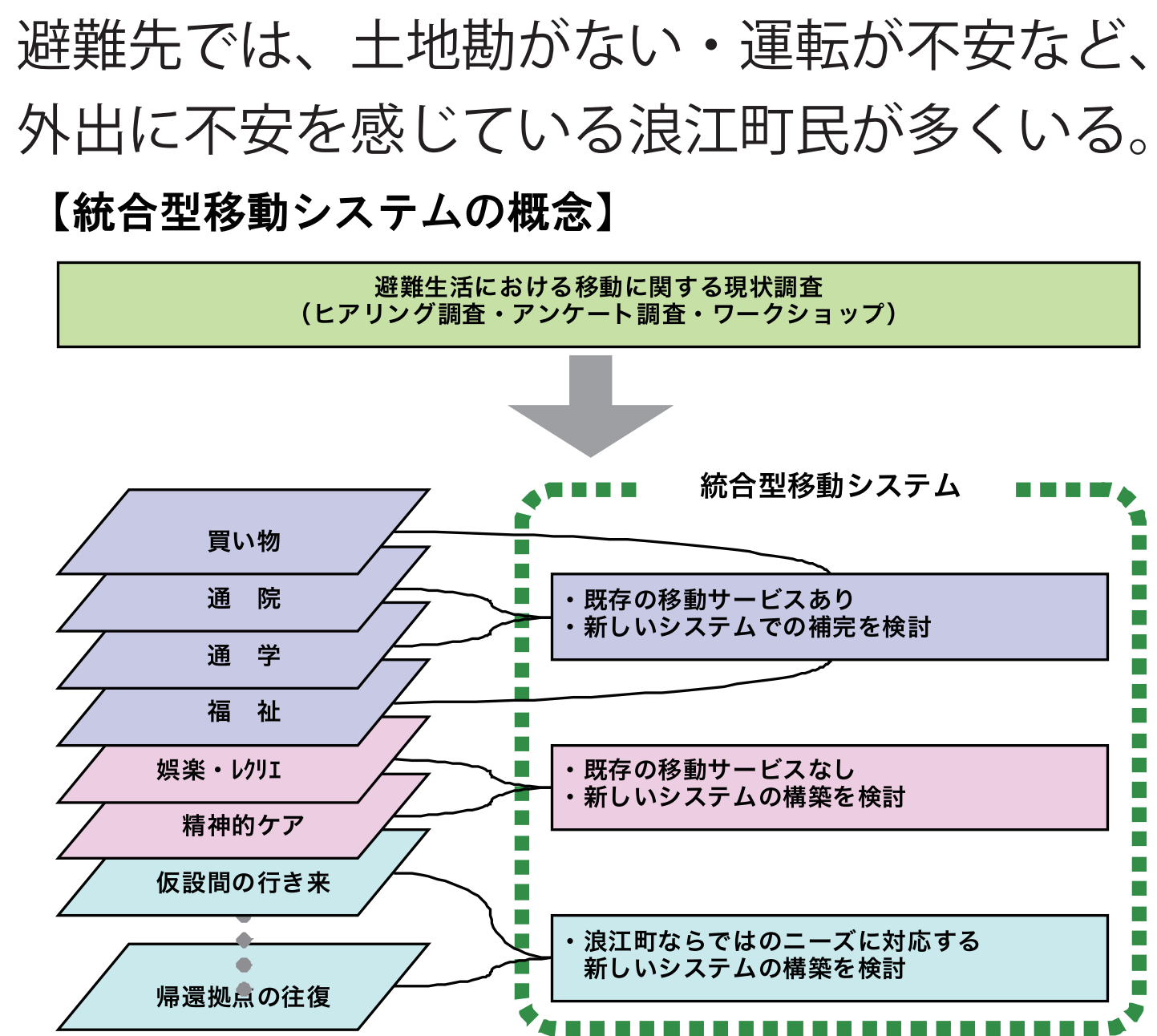
「包括的生活サポートシステム」、避難者の心理的状況の把握・総合評価の成果を取り入れ、

- 1) ネットワーク・コミュニティを前提とした多様な居住様式に対応する住まいと生活像の在り方、
- 2) 町外コミュニティを段階的に充実させるための、循環的な居住環境の改善プログラム、
- 3) 町外コミュニティの周辺地域との連携のための空間デザイン
- 4) 帰還のための元の浪江町内に必要となる「町内コミュニティ」のための前線基地となる場のデザインに具体的に取り組む。

II：包括的サポートシステムの開発

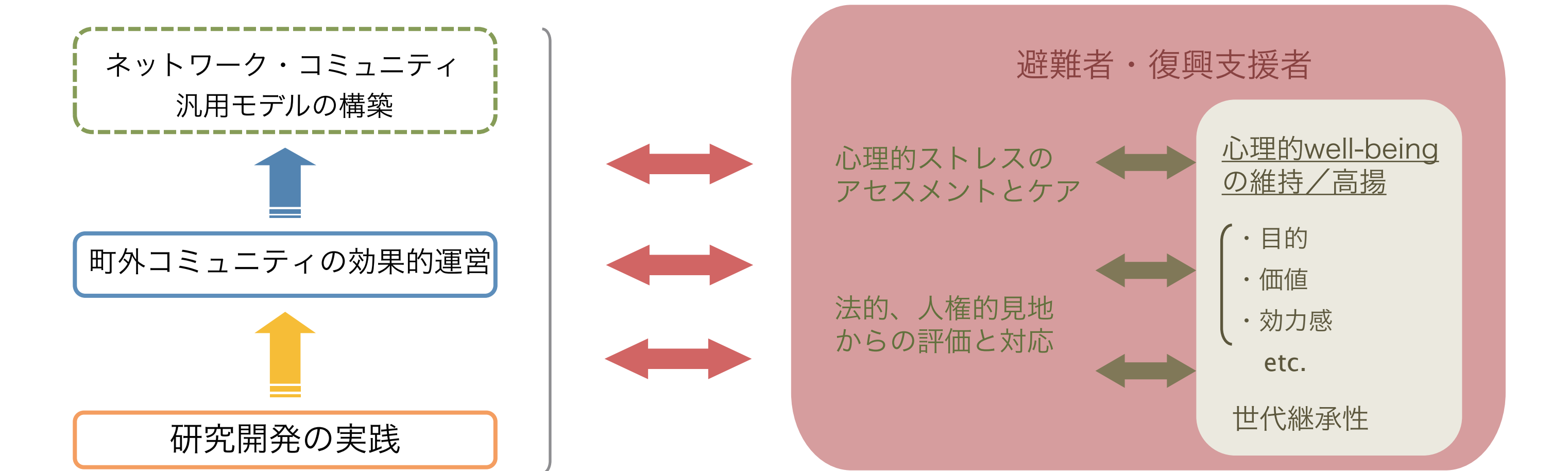


III：統合型移動サービスシステムの開発



IV：モニタリングと科学的評価システムの開発

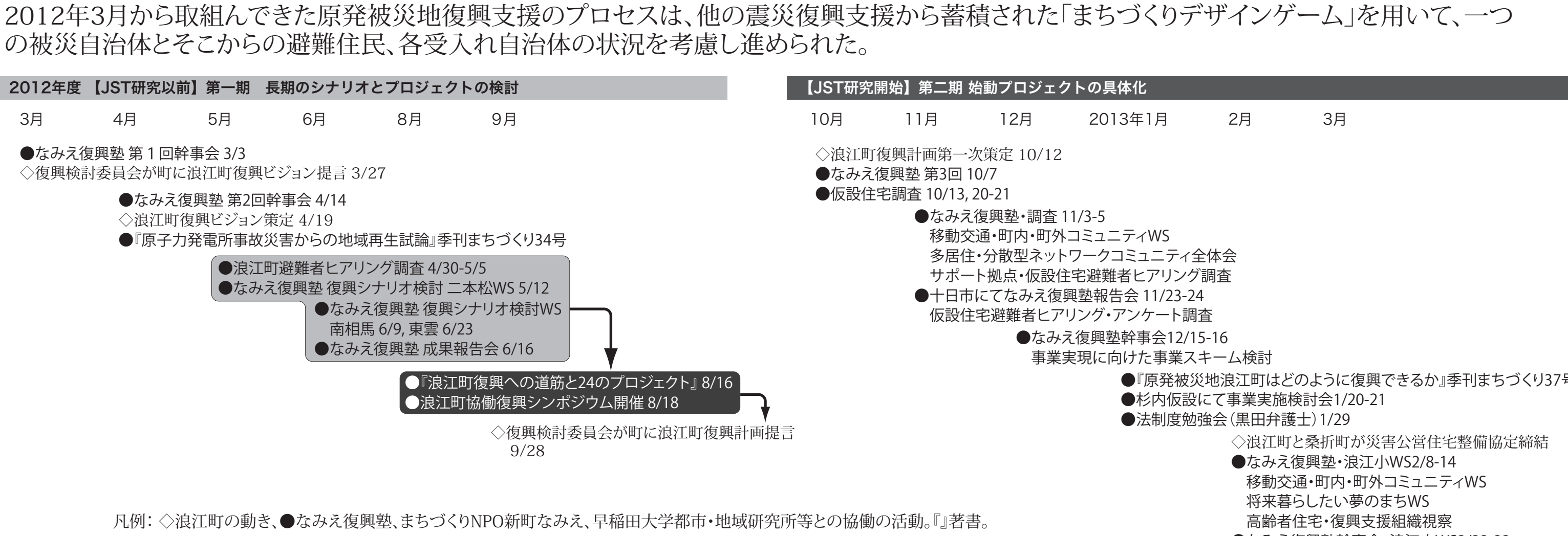
総合評価システムの開発 — プロジェクトを心理的、法的側面から支える—



- 1) 初年度に実施するネットワーク・コミュニティの実態把握を基礎にして、心理的ウェルビーイングの信頼性の高い尺度を構成し、
- 2) 被災高齢者を中心にモニタリング対象者を選定し継続的なインタビュー調査によって心的ウェルビーイングの変化を評価し、
- 3) 最終的に、本プロジェクトが目指す「ネットワーク・コミュニティ」を総合的に評価する。

平成 24 年度の成果

なみえ復興塾を中心とした検討の流れ



①～③：なみえ復興塾の復興シナリオ検討WSのツール等

①ロールプレイ

荒木 香 (女)

年齢：30代
職業：専業主婦
家族：夫と小学生の息子、3歳の娘

ヒアリング調査に基づいて設定した仮想の人を演じる為のツール。仮想の人として客観的な意見を話すうちに個人の想いが出てくる。

②周辺環境の設定

仮の住まいに落ち着きました。

借り上げ住宅 仮設住宅

被災後約2年：復興準備の計画・構想の時期

①のロールプレイでは、模型やパネルを使い被災後の重要な周辺環境の変化（復興公営住宅の完成など）を示し、参加者の発言を促した。

③旗さし

地図に描かれた放射線を考慮しつつ実現させたい取組みが描かれた旗を挿して意見を整理し参加者全員で共有した。

24のプロジェクト

④模型やツールを用いた復興シナリオ検討WSの様子

会場では、模型と①～③のツールを使用して参加者に状況を説明して意見を取りまとめ今後の暮らしの場を中心としたコミュニティの模型をCCDカメラを通して投影し議論した。原発被災地の復興シナリオを検討する際には、公式データやヒアリング調査を基に、現状の放射線量（使用する地形模型に記載）、町のインフラや公共施設整備の目処、除染・復旧状況、開催地の避難者の状況を反映した。①のロールプレイや③で整理した個々のプロジェクトをこのように組み合わせることで復興シナリオを実現するのかを検討・共有した。この積み重ねによって、一人一人が自分のシナリオを考え、他のシナリオと比較しながら議論するようになり、第二期の検討に至っている。

①ヒアリング調査

岳下仮設住宅においてヒアリング調査を実施し、その結果をもとに、新ぐるりんこや町外コミュニティでの提案を検討するためのWSを行った。

②幹事会

浪江町民全体のワークショップを行う前に、各職種のリーダーに集まって頂き、具体的な事業実現に向けた検討が行われた。

③アンケート調査

浪江町民の生活行動調査を主に交通の視点から行った。現状の移動手段や外出の機会、目的地などを調査し、新ぐるりんこの検討に活用した。

浪江宣言13・03

④模型やツールを用いた復興シナリオ検討WSの様子

第二期では、新ぐるりんこ、町内の帰還拠点、まちなか型町外コミュニティ、郊外型町外コミュニティ、町内ニュータウン、の五つのワークショップが並行に進められた。初期段階では、第一期でまとめられた内容をモデル化し、これに対して、意見が交わされた。その後、具体的な空間を実現していくための事業スキームについて検討が行われた。最終段階では、これらを踏まえ、浪江町民の自由な発想で将来の空間像を描いてもらうワークショップが行われた。積み木や貼り絵などを用いることで、お互いのイメージが形にされていた。第一期より、大人を中心に話し合いが進められて来たが、第二期では、浪江小学校でのWSを同時に行うことで、町の将来を担っていく子どもたちとも将来像の検討を行うことが出来た。

町外・町内コミュニティの検討



ぐるりんこ広場の検討

ぐるりんこ広場は新ぐるりんこの停留所になるだけでなく、様々な移動サービスがやってくることで、使われ方が変化する広場です。

移動書店

移動カフェ

定期市場

バスターミナル

佐藤グループが実施するネットワークコミュニティのデザイン策定のための活動や、浅野グループが実施する移動サポートシステム「新ぐるりんこ」の導入などによって生じる避難民の生活形態や心理的状態の変化を捉えることを目標としている。今年度は、そのための基礎的資料を収集するため、メンバーが復興塾のワークショップや発表会、仮設住民が企画する関連行事が実施される場所に赴いて参加者の行動観察を実施、可能な場合には、参加者に依頼して30～60分程度の面接をおこなった。また、NPO法人新町なみえ及び杉内多目的運動場仮設住宅の自治会長の協力を得て、主として仮設住宅集客室において住民の面接を実施してきた。現在、約20名に対して実施したほか、同仮設住宅において来る3月28、29日に集中的に実施している。復興塾関係者へのヒアリングは、NPO法人新町なみえの理事長および中心的な会員3名に実施、これらに加えて二本松市民も含めヒアリング調査を実施した。

以上のヒアリングおよび面接調査の結果を適宜検討し、それに基づいて質問紙調査の内容および実施方法の具体的な計画を進めるために、グループミーティングを12月22日（福島大学）と3月17日（尚絅学院大学）に実施した。これらのミーティングにおいては、メンバー間の知識の共有を進めるとともに、避難者の心理状況を捉える枠組みの予備的検討をおこなった。この暫定的なモデルに修正を加えた上で、3月28日の今年度最後のミーティング（二本松市）において質問紙に含める項目を検討、暫定版を作成した。

また、プロジェクトの柱の一つである包括的地域情報システムに関する評価の基礎的データを収集する方法について検討を始めた。現在、自治会代表者等約30名にiPadを配付し、第1回の講習会が開催された段階であるが、今後、この種の会合にメンバーが同席し、情報提供者の行動観察を行うほか、情報伝達の評価方法について検討を加えることになる。



5月9日：杉内仮設住宅にて、町外コミュニティの模型を撮影した動画を用いて、グループヒアリングと個人アンケート調査を実施し、今後の居住意向を把握した。



5月25日：早稲田大学にて開かれたシンポジウム「いま早稲田は何が出来るのか」に参加し、これまでの支援活動について報告した。また異分野における連携の意義について意見交換を行った。

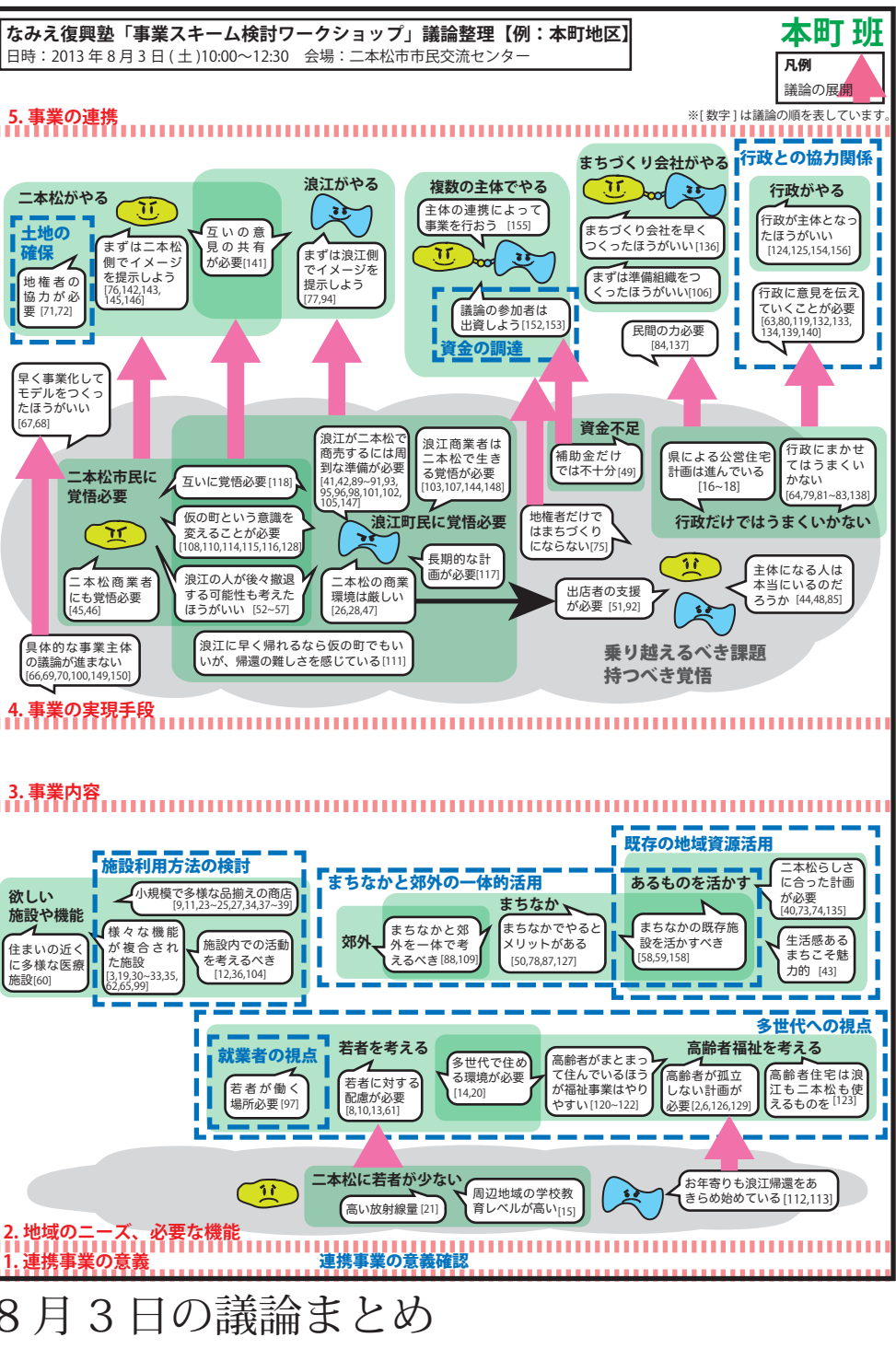
6月22日：「NPO 法人まちづくり二本松」と「まちづくり NPO 新町なみえ」の共催にて、二本松市街地のまちあるきを実施した。避難先の抱える課題に対しても有効な町外コミュニティの形成をめざし、連携復興へ向けた第一歩の取り組みとなった。この様子は福島民報にて取り上げられた。



6月16日：NPO 新町なみえ主催の浪江町民交流会が早稲田大学にて開かれ、活動報告と意見交換会を行った。ヒアリングやアンケートを通じ、主に東京周辺に避する浪江町民の現状や意向を把握した。



8月3日：二本松市内にて、浪江と二本松の事業者が集まり、町外コミュニティの実現に向けた事業スキーム検討ワークショップを開催した。



8月3日の議論まとめ



8月19日：二本松市内にて浪江町商工会参加のもと、町外コミュニティ形成に向けた事業スキーム検討ワークショップを開催した。



9月27-29日：浪江町民が避難する二本松市内の仮設住宅を訪問し、自治会から避難生活の現状を伺うと共に、iPad を利用した情報発信を担う人材の発掘を行った。



9月14日：二本松市内にて、浪江町の仮設・借上自治会長による自治会長会議が開かれた。避難生活の現状と町外コミュニティに求める機能についてワークショップを開き、意見交換を行った。



10月27日：二本松市内にて、iPad 講習会開催。学生とまちづくり NPO 新町なみえが、iPad、携帯、パソコンを用意してサポートした。各仮設・借上住宅のリーダー層を中心に、年間5回の講習と個別訪問を実施し、基本操作を習得し、Facebook のグループで、情報共有・発信を開始した。

4月：なかよし号運行開始

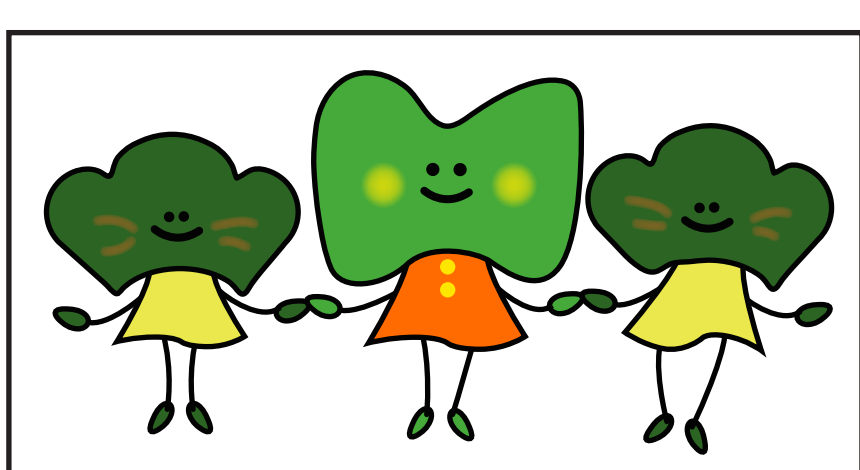
6月：会員へのヒアリング調査

■なかよし号運行開始

ドア to ドア運行、会員は事前に利用予約をする。運行範囲は片道 30 分程度までとなっている。



なかよし号車両



なかよし号ロゴ

運行開始日：4月16日
会員数：60名（12月5日時点）
会員平均年齢：81歳
会員属性：仮設住宅53名、借り上げ住宅7名
平均乗車人数：のべ3.9人/日（4~11月度）

■会員の声（6月のヒアリング調査より）

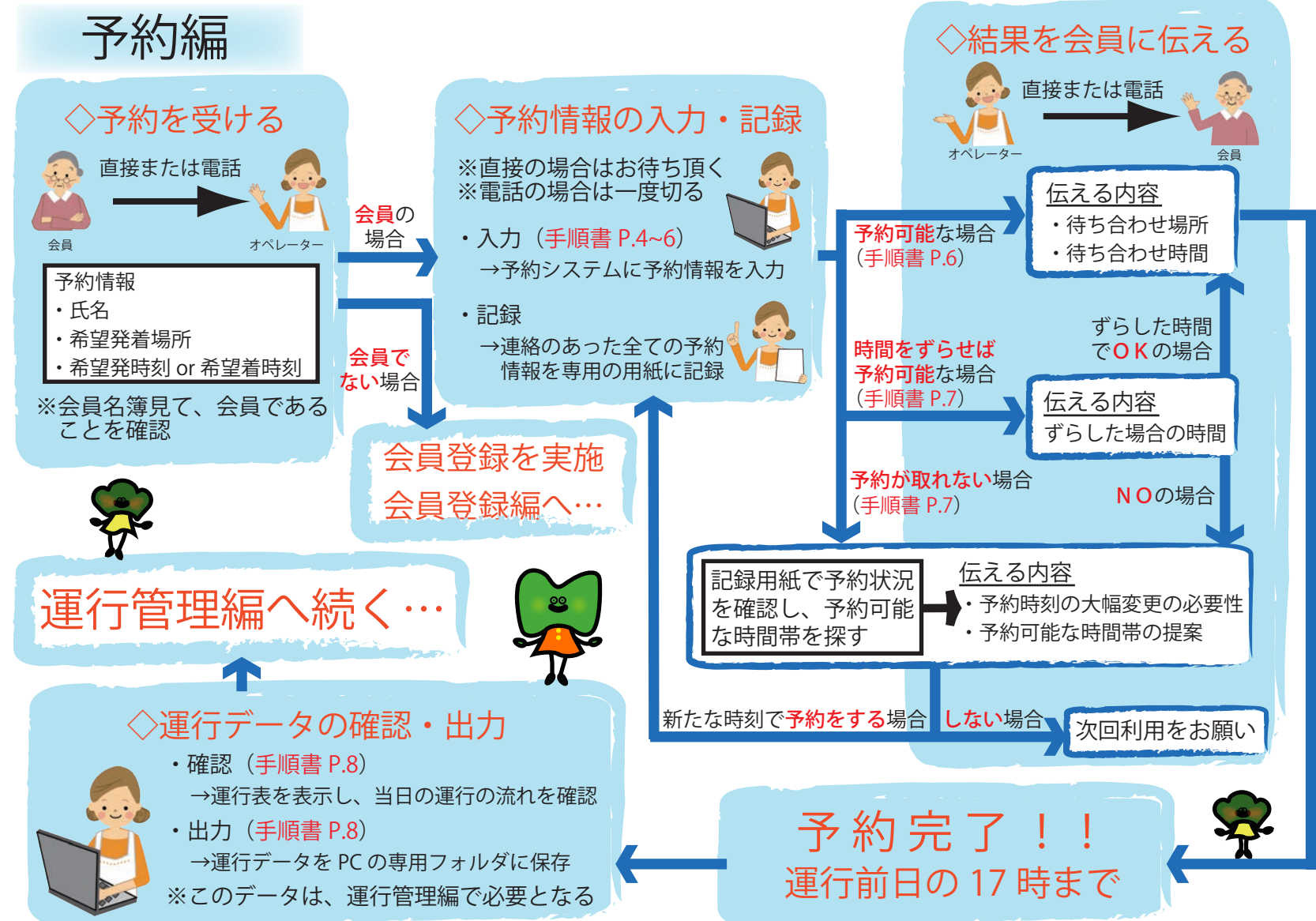
- ・行きたい場所に、好きな時間に行けるので便利
- ・運転者が優しい方なので安心
- ・今まで行けなかった場所に行けるようになった

- ・3人のなので大勢では使えない
- ・帰りの予約が難しい（時間がよめない）
- ・無料での利用が申し訳ない

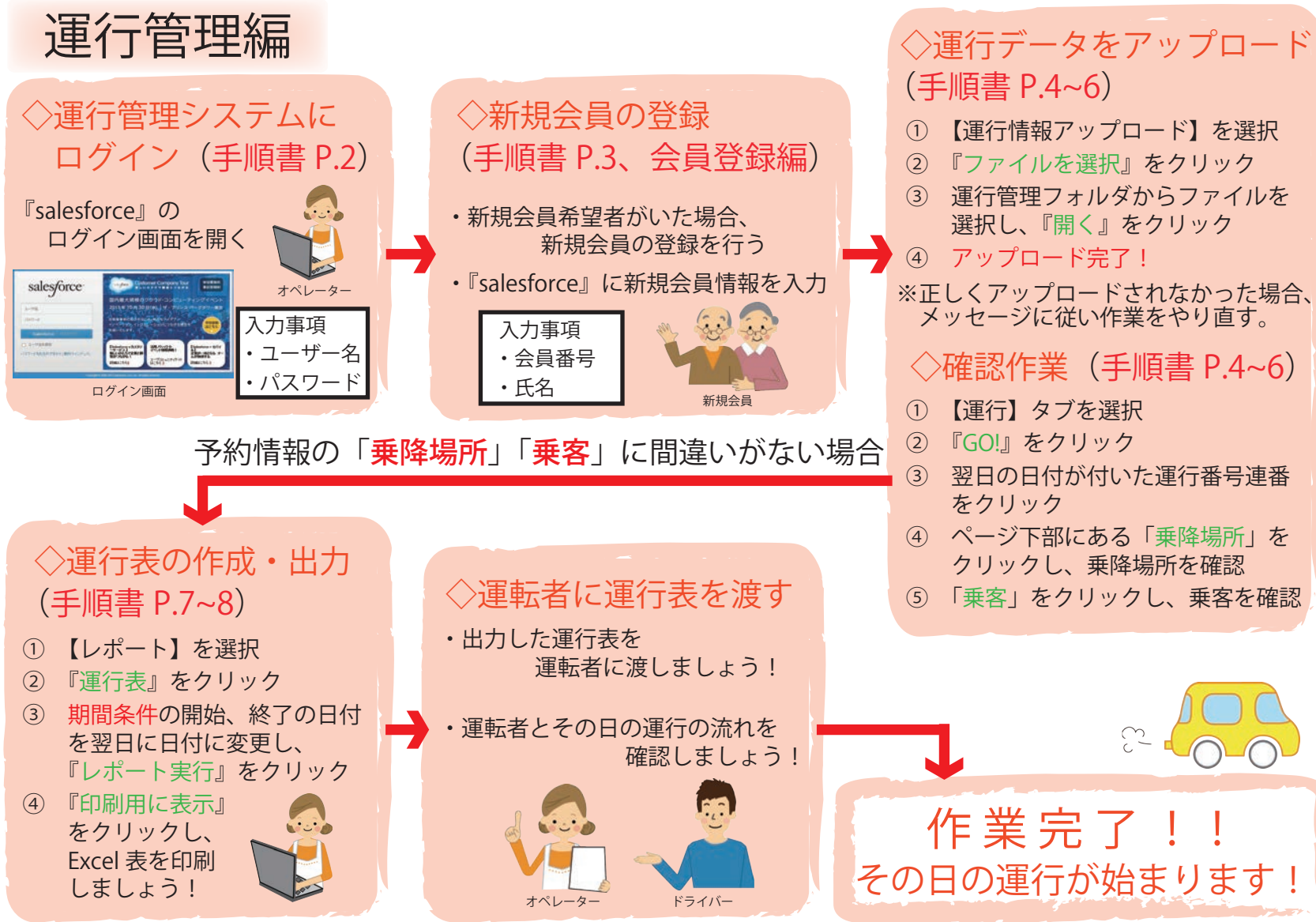
9・10月：予約・運行管理システムの開発

社会実験の際の予約・運行管理の流れ

■予約の流れ



■運行管理の流れ



11~12月：社会実験の実施

12月：会員へのヒアリング調査

■社会実験の実施（11月13日～12月2日）

11月13日から12月2日にかけて、社会実験を実施しました。左下の大型の車両（8人乗り）を使用し、新たに借上げ住宅に住む方も会員に迎え、予約・運行管理システムを導入したなかよし号の運行を行いました。



実験期間中の車両（右の車両も使用）

■会員へのヒアリング調査（12月1日～3日）

実験終了と同時に、会員の方へのヒアリング調査を実施しました。利用した方・しなかった方に分け、なかよし号への感想や意見を収集しました。

利用した会員	
調査項目	目的
個人属性	
以前の移動形態	
なかよし号利用の感想	→ 会員の満足度を評価
なかよし号に対する意見・要望	→ 今後の運行形態検討の一助
利用しなかった会員	
調査項目	目的
個人属性	
現在の外出実態	→ 運行計画策定の一助
なかよし号に対する意見・要望	→ 今後の運行形態検討の一助

- ・町外・町内コミュニティのデザイン
- ・継続的将来シナリオの検討

- ・ⅡⅢⅣの連携による実装実験
- ・システムの評価と改善

避難住民への面接調査

目的：実施予定のアンケート調査の作成に向けて、対象者の現状を主として心理的側面から把握する。

●被面接者：二本松市に住む浪江町民49名（男性18名、女性31名）、年齢42-92歳（平均74.67歳、不明3名）＊65歳以上対象

●手続き：仮設住宅の集合所等において原則として個人を対象に実施した。承諾が得られた場合には、発言を録音した。面接時間は10～90分。終了後に謝礼を呈呈した。質問内容：被面接者の基本属性、発災後の行動、仮設住宅における生活、現在の家族構成、生活上の問題、浪江町への帰還希望、浪江町の評価、将来の展望、二本松市の印象、心身の状態など

●結果：被面接者の多様性を考えると一般的な結論を導き出すことが困難であるが、面接で得られた印象から、浪江町民の心理的、身体的状態に影響を及ぼしている要因を「喪失」という観点からまとめるとともに、面接記録に対してテキストマイニングを実施し（true teller〔野村総合研究所〕による）、参考資料とした。

表1 分析例：浪江町のいいところ（係り受け上位10個）

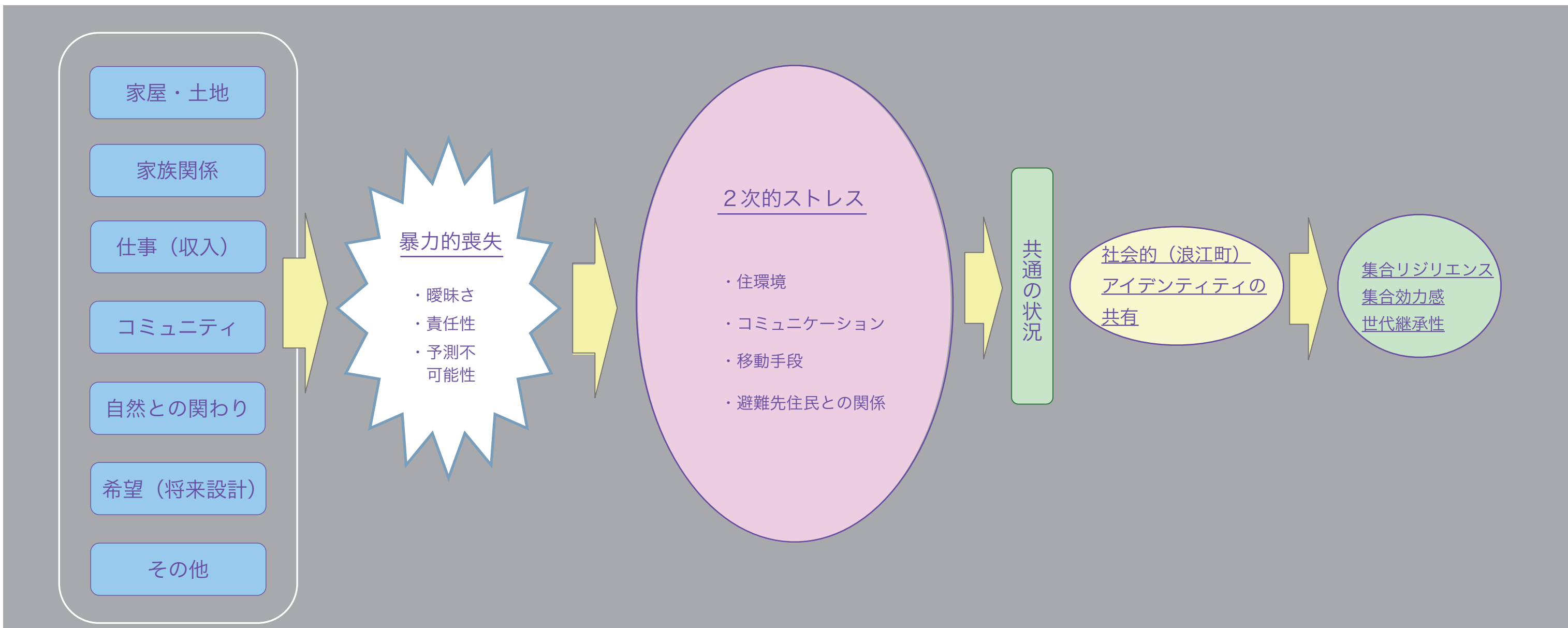
No.	名詞	全体	形容詞・動詞	タイプ	単語頻度
1	海	8	ある	名-動	6
2	人（人柄・人間関係）	10	良い	名-形	6
3	山	9	ある	名-動	5
4	気候	9	良い	名-形	4
5	空気	4	良い	名-形	4
6	川	7	ある	名-動	4
7	浪江町	14	良い	名-形	4
8	景色	3	良い	名-形	2
9	桜並木	3	ある	名-動	2
10	山菜	3	採る	名-動	2

表2 分析例：二本松の印象（係り受け上位10個）

No.	名詞	全体	形容詞・動詞	タイプ	単語頻度
1	雪	13	多い	名-形	6
2	雪	13	降る	名-動	5
3	坂	6	多い	名-形	4
4	人	16	いる	名-動	3
5	人	16	良い	名-形	3
6	気候	3	寒い	名-形	2
7	坂	6	ある	名-動	2
8	人	16	ない	名-形	2
9	人	16	やさしい	名-形	2
10	店	2	ある	名-動	2

- 家屋・土地
 - ・対象者の中で、地震や津波によって家屋が大きな損傷を受けた人は少なかったが、自由に立ち入りできず、「喪失」した状態にある。
- 家族
 - ・高齢者の多くは子や孫と同居、あるいは近隣に住んでいたのが、放射能の問題や住居問題により別居せざるをえない状況に追い込まれている

- 自然との関わり
 - ・浪江町のいいところとして、自然（山、川、海）があり景色がよい／気候があたかくて住みやすい／人柄がよい、などが多くあげられた（表1）。
 - ・震災によって、豊かな自然に接することが困難になった
- 二本松市の印象
 - ・二本松市の印象は、雪が多いことや気候が寒いこと、また坂が多いなどがあげられた。
 - ・避難先の二本松市も自然に囲まれてはいるが、気候や環境が大きく異なり、浪江町の人は慣れない環境の中で避難生活を送っている



- ・第2次の連続インタビュー調査
- ・喪失から復興にいたる心理過程のモデル化